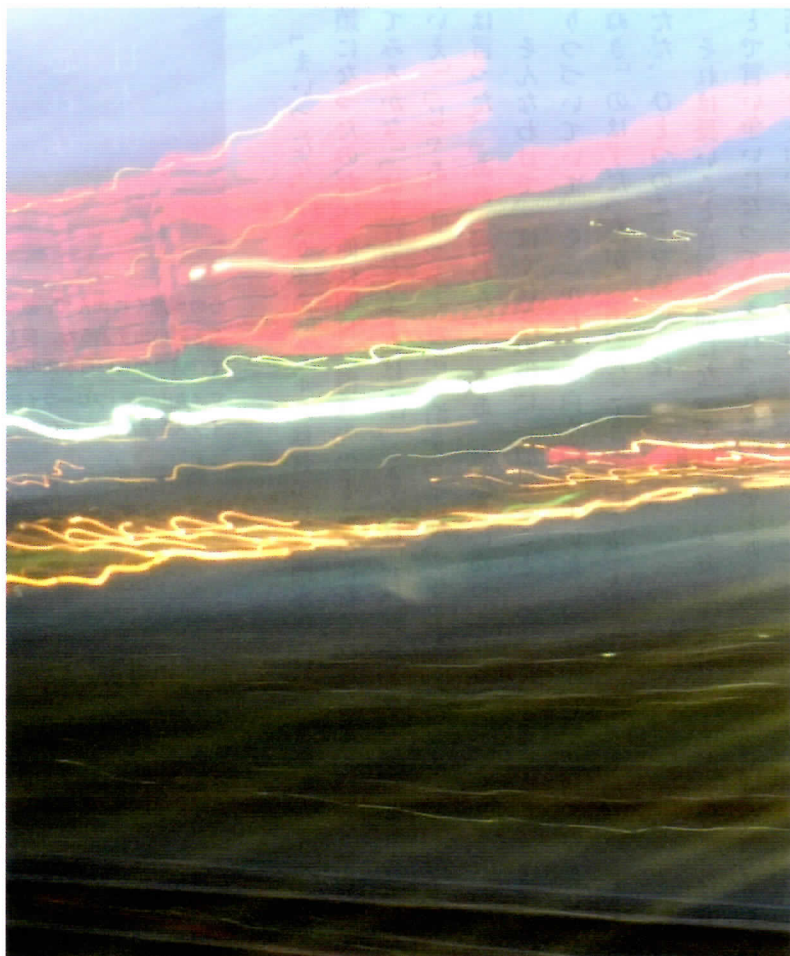


大井実の
BOOKな話

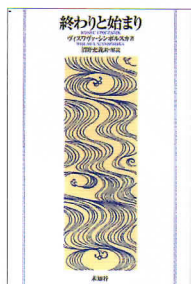
福岡市内で書店『ブックス
キューブリック』をいとなむ
大井実さんの、本のある日
常をつれづれに。

撮影／川上信也

すばらしい本との出会いは、人との出会いと同じように、劇的なものを感じることがあります。



『終わりと始まり』
ヴィスワヴァ・シンボルス
カ著、沼野充義訳・解説／
未知谷／1,400円（税別）



※今回は映画のご紹介は
お休みします。

昨年の秋に、ちょっと劇的な本との出会いがありました。9月号のこのコーナーでご紹介した詩人の谷郁雄さんを10月にお呼びしてトークショーを開いたんです。谷さんは『日々はそれでも輝いて』というエッセイの中で、ヴィスワヴァ・シンボルスカというポーランド詩人が書いたとある作品を高く評価していて、トークショーでもそのことが話題になりました。私もそこで初めてシンボルスカと彼女の詩を知り、とても素敵な作品だと思いながら、谷さんの話を聞いていたんです。で、次の日、文芸評論家の沼野充義さんという方を招いた別の催しがあったのですが、スタッフのひとりが沼野さんが翻訳した詩集を持ってきたんです。なんと、それは偶然にもシンボルスカの詩集。私はそこに不思議な出会いを感じました。まったく知らなかったシンボルスカの作品とある日出会い、その訳者を通じて同じ詩人の詩集に出会

う。いい本との劇的な出会いです。前置きが長くなりましたが、それが今月ご紹介する『終わりと始まり』。シンボルスカは'96年にノーベル文学賞を受賞するまではポーランド国内でもほとんど無名の詩人でした。彼女の詩はどの作品にもわかりやすい言葉を使いながら、そこには詩ならではのわかりにくさにもじんできいます。ちなみに谷さんが著作で取り上げたお気に入りの詩『詩の好きな人もいる』は、詩を好きな人は少数、詩はわかりにくいと淡々と表現した作品。谷さんは、わかりやすいことより、「わからないこと」こそ人生において大切なこと、それこそ詩の本質だというシンボルスカの考え方に共感しています。私もまったくその通りだと思いました。そして、詩人が、詩に対する人びとの一般的な印象を、卑下するでもなく嘆くわけでもなく淡々と語る、その潔さ、彼女の立ち位置がとても印象的でした。